
工学部 機械システム工学科

工学基礎科目

専門科目

機械システム工学科

人材の養成及び 教育研究上の目的

機械工学、電気工学、制御工学の基礎を幅広く学修し、機械システムを設計する実践的な経験を積むことにより、社会の多様な要請に応じた機械システムを構築できる技術者を養成することを目的とする。

主任教授 田中 康寛

1. 機械システム工学科とは

自動車、航空機、ロケットなどの輸送機や、工場、発電所、高層ビルなどの設備、あるいは冷蔵庫、エアコン、パソコンなどの生活用機器など、我々の周りにあるさまざまな“機械システム”は、その機械的要素と電気的要素を制御（コントロール）することによりその機能を発揮する。すなわち、今日の人工物は、機械的要素と電気的要素を複雑に融合させることにより、多様な機能を発揮することができる。

機械システム工学科は、このような“機械システム”を理解し、設計できる技術者の養成に主眼をおいた教育を行う学科である。すなわち、本学科では、機械工学、電気工学、制御工学の各要素技術を駆使し、それらを統合して最適なシステムとして作動できる機械システムの設計・製作、維持管理などに従事できる技術者育成の基礎教育を目指す。

そのため、諸君はまず機械工学の基礎である力学、特に運動・機構学、材料力学、熱力学、流体力学などを学習し、その上で制御技術、電気・電子技術、情報処理技術やソフトウェア技術に関する基本を学ぶ。これらの学習により、“機械要素技術のシステム統合を行う工学”と定義付けられる“機械システム工学”の基礎を身に付けることができる。以下はそのための学修指針である。

2. 本学科における学修指針

(1) 高校までの勉強と大学における学修の違い

高校までは、ほとんどすべての科目が試験により評価され、多くは大学へも試験により入学が許された。つまり、諸君は勉強の目的を、上位の学校に入学するためと考えているかもしれない。しかし大学の目的は、諸君を社会に役立つ人材に育成することであり、教員は、いわゆる筆記試験に合格するためだけの勉強を学修とは考えていない。

“学修”とは自らが必要であると思うことを“学び、修める（身に付ける）”ことを指し、学ぶという言葉は、教わるという受動的な態度ではなく、能動的な態度を示す。社会では、仕事は教わるものではなく、学ぶものだということが常識であり、諸君は学ぶことそのものを身に付ける必要がある。

「教え方が悪いから分からない。」という言い訳は基本的に大学や社会では通用せず、多くの場合は学び方が悪いと評価される。すなわち、“学修の主体と責任は学生にある”ということを理解してほしい。

また、試験の際に正解を書くことが学修の目的ではない。仕事の現場では、常に学んだことを応用することが要求される。したがって、学んだことをいつでも引き出せるように、身に付けることが必要なのである。高校までの勉強から脱却し、学修へと順応することが大切である。

(2) 論理的思考の訓練を

工学あるいは機械技術の現場では、すべての現象を完全に説明できない場合でも、最善を尽くし、機械、設備などを設計し使用することがある。これは、その時点において、未知の要因があることなどによるもので、そこに学問の発展の余地や新たな技術開発の可能性があることも示している。

しかしながら、将来有能な技術者として活躍することを目指す諸君は、これからの4年間、未解決の要因を残し、あいまいなまま学修することのないように心がけてもらいたい。実験や実習において、観察あるいは体験した現象がどのような過程により起こるのか、その理論的裏付けは何か、授業において学んだ理論がどのようにして導かれるのかなど、それらの理由を論理的に筋道正しく理解してもらいたい。時間がかかっても絶えず、“なぜ”と問いながら学習し、本質は何かを考え、間違っても理論や実験結果をうのみにして暗記することは避けるべきである。時には簡単な実験を自分で独自に行うのもよいであろう。そのような努力によって“思考力”の向上が図られるのである。

論理的に考えることで、正しい理解力、判断力、批判力の一層の養成が可能であり、“問題解決能力”も高められ、思い込みによる誤解も避けることができる。機械システムの設計を行う上ではこれらの能力が欠かせない。“論理的思考”の訓練は、将来それぞれの技術分野で活躍するとき、独創的な発想や研究・開発に役立つであろう。

(3) 工学基礎科目の学習

与えられた条件の下で筋道を立て解決してゆく必要がある“数学”は、論理的な思考の訓練に適していると共に、機械システムを考える上で欠かせない。また、“コンピュータ”も機械システムを考える場合に不可欠である。このようなことから、機械システム工学科の工学基礎科目では、数学やコンピュータの学習に重点を置いている。なお、数学などの問題を解く際に“直感”や“ひらめき”の必要性を経験したことがあるであろう。“勘”や“想像力”はエンジニアとしての重要な素養であり、エンジニアリングをもじってカンジニアリングとも言われる。しかしこれは、単なる思いつきではなく、訓練された論理的思考に基づいた豊かな経験と感性、すなわち“エンジニアリング・センス”によるものであり、これを養うことも心がけるべきである。

(4) 低学年における専門科目の学習

低学年に配置された専門科目は、工業力学、材料力学、流れ学、熱力学、電気物理、電気・電子回路などのように、“力学”や“電気”に関連する科目が多い。これらの科目は物理学の各分野の基本原則を出発点としており、機械や機械システムを考える上で基本となる科目である。これらの科目において、物理現象の本質について筋道を立てて理解する訓練をし、基盤となる知識としてしっかりと学習してもらいたい。工学の基本は“世の中に役立つこと”であることは言うまでもないが、将来の夢を大きく実現させるために学生時代には、すぐに役立つことに目を奪われたり、目先のことにとらわれ過ぎたりすることなく、基礎を固め、論理的な考え方や問題解決能力を身に付けるべきである。

(5) 体験学習科目の学習

実験や実習・演習科目は机上で学んだことを確実にする、また理解を早めたり、深めたりする上で欠かせない。これらの“体験学習”科目はできるだけ多く履修してもらいたい。なお、3年生に担当された「機械システム設計演習(1)、(2)」は必修であり、低学年で学習した内容の総仕上げをする科目でもあり、同じく必修である“卒業研究”と共に、“総合力”を高めるための“本学科の要”の科目である。

また、体験学習科目では“報告書”の提出が必須である。報告書は相手を読まなければ何の意味もない。報告書では、事実関係などと共に報告者の意図するところを他人が読みやすいよう、簡潔かつ正確に記述し、考えを主張する必要がある。報告書の作成訓練は、各自の考えを論理的に記述する練習であり、将来、技術関係の報告書や論文を書くための基本の学習である。“日本語文章力”も技術者として重要な素養であり、美文ではなく分かりやすい簡潔な文章作りを心がけ、他人の真似に終始することや独りよがりな文章とならないよう、絶えず努力すべきである。

(6) 高学年の専門科目の学習と大学院進学

高学年の専門科目は大学院での学習に直結するものが多い。低学年での学習を通じて各自の将来を考え、これらの科目は精選して履修することが望ましい。その上で“大学院”へ積極的に進学することを勧める。専門の基礎学力を積んだ後の大学院生活においては、各自の想像力、独創力などの一層の修練が可能であり、問題解決能力に加えて“問題発見能力”も高められ、将来、技術者、研究者として社会で活躍するための本格的な素養を身に付けることができる。なお、高学年の科目の中には理論などがまだ確立しておらず、最適な解を模索中の分野の内容を含んだ科目や、企業における実際の問題に直結した内容の科目などがあり、卒業後の進路選択の参考になるであろう。

3. 終わりに

以上、学修指針の概略を述べたが、機械要素技術のシステム統合の実現は個人プレーでは難しい。グループ学習が必要な科目を設け、その点を配慮したが十分とはいえない。先輩や後輩と共に活動できる“課外活動”への参加や多くの“友人”を持つこと、全学共通に開講している少人数編成の科目である教養ゼミナールの履修などはよい方法であろう。議論の場が増え、論理的思考の訓練にもなる。また、国際化の時代、“英語力”の向上も必要である。

さらに、システム志向を目指すには“幅広い教養”も欠かせない。人文社会科学系科目の履修、学内で開催される講演会の聴講、読書などにより、さまざまな分野について広く学んでももらいたい。

これまで長年、諸君の先輩たちの学生生活を観察し、また指導してきた経験から得られた結論から判断すれば、諸君の“入学初年度の過ごし方”がその後の学園生活、さらには将来をも大きく左右すると考えられる。このことを心して考え、初心を忘れずに“有意義な4年間”となるよう努力することを期待する。

平成 28 年度 機械システム工学科 教育課程表

学則第 18 条別表 1-1② 工学部 工学基礎科目 教育課程表 — 「機械システム工学科」 抜粋再掲

○印必修科目 △印選択必修科目

区 分	科 目 群	授 業 科 目	必 選 の 別	単 位 数	週 時 間 数								担 当 者 (平成 28 年度現在)
					1 年		2 年		3 年		4 年		
					前	後	前	後	前	後	前	後	
工 学 基 礎 科 目	数 学 系	数学基礎		0	2								矢作, 羽賀, 澁谷, 湯浅
		微分積分学(1)	○	2	2	(2)							志賀啓成, 森田和子
		微分積分学(2)	○	2		2	(2)						志賀啓成, 森田和子
		線形代数学(1)	○	2	2	(2)							陸名雄一, 橋本義武
		線形代数学(2)	○	2		2	(2)						陸名雄一, 橋本義武
		微分方程式論	△	2			2						島野健仁郎
		ベクトル解析学	△	2			2						渡邊力夫
		フーリエ解析学	△	2			2						鈴木勝正
		関数論		2				2					古田公司
		数理統計学	△	2			2						市川博
		代数学(1)		2			2						井上浩一
		代数学(2)		2				2					井上浩一
		代数学(3)		2				2					古田公司
	自 然 科 学 系	物理学基礎		0	4								物理学教室
		物理学(1)	○	2	2	(2)							中村正人, 右近修治
		物理学(2)	○	2	2	(2)							中村正人, 右近修治
		物理学(3)		2		2							中村正人
		物理学(4)		2		2							中村正人
		電磁気学基礎		2			2						岩松雅夫
		相対論入門		2				2					長田剛
		物理学実験	○	2	4	(4)							物理学教室
		化学(1)		2	2								吉田真史
		化学(2)		2		2							吉田真史
		分子構造論		2			2						吉田真史
		生命の化学		2				2					吉田真史
		化学実験		2	(4)	4							化学教室
		生物学(1)		2			2						宮崎正峰, 鈴木彰
		生物学(2)		2				2					宮崎正峰, 鈴木彰
		生物学実験		2			4	(4)					吉田真史, 鈴木彰, 他
		地学(1)		2			2						萩谷宏
		地学(2)		2				2					萩谷宏
		地学実験		2				4	(4)				萩谷宏, 他
	情 報 系	情報リテラシー(1)	○	1	1								山口勝己, 安井浩之
		情報リテラシー(2)	○	1	1								山口勝己, 安井浩之
		コンピュータ概論		2		2							安井浩之
		プログラミング基礎	△	2		2							山口勝己, 安井浩之
		数値解析		2			2						木村誠聡
		ソフトウェア工学概論		2					2				安井浩之
	工 学 教 養 系	工学リテラシー	○	2	2								佐藤大祐, 熊谷正芳
		技術日本語表現技法	○	2	2								野中謙一郎, 渡邊力夫
		技術者倫理	○	2					2				田中康寛, 今福宗行, 他
		環境概論		2	2								堀越篤史, 眞保良吉, 他
		環境と社会		2		2							堀越篤史, 岡田往子
		科学技術史		2		2							吉田真史, 森下直紀
		インターンシップ(1)		1									佐藤大祐
		インターンシップ(2)		1									佐藤大祐
海外体験実習(1)			2										
海外体験実習(2)			2										
科学体験教材開発			2	2								栗原哲彦, 杉本裕代, 中村正人, 岩崎敬道	
金属加工（製図・実習含）			2				2					大谷真一	
電気工学概論（実習含）			2			2						江原由泰	

卒業要件	30 単位
	以下を含むこと
	○必修科目 22 単位 △選択必修科目 8 単位

学則第18条別表1-1④ 工学部 機械システム工学科 専門科目 教育課程表

○印必修科目 △印選択必修科目 ■印学科基礎選択必修科目 ★印実験実習選択必修科目 ☆印研究室指定選択必修科目

区分	科目群	授業科目	必修の別	単位数	週時間数								担当者 (平成28年度現在)
					1年		2年		3年		4年		
					前	後	前	後	前	後	前	後	
専門科目	学科共通	機械工作概論	○	2	2								今福宗行, 熊谷正芳
		機械材料	△	2		2							今福宗行
		工業力学(1)	○	2		2							大谷眞一, 宮坂明宏
		工業力学(2)	○	2		2							佐藤大祐, 関口和真
		電気物理及び演習	○	3		4							田中康寛, 三宅弘晃
		機械システム	△	2			2						佐藤大祐
		機械要素	△	2				2					千葉和茂
		振動工学	△	2				2					金宮好和
	材料力学	材料力学(1)	○	2			2						今福宗行, 宮坂明宏
		材料力学(2)	△	2			2						今福宗行
		材料力学(3)		2				2					熊谷正芳
		強度解析学	☆	2					2				大谷眞一
	熱流体工学	熱力学(1)	○	2			2						郡逸平, 永野秀明
		熱力学(2)	△	2				2					郡逸平
		熱力学(3)		2					2				郡逸平
		流れ学(1)	○	2			2						島野健仁郎, 藤原仁志
		流れ学(2)	△	2				2					島野健仁郎
		流れ学(3)		2					2				郡逸平
		伝熱工学	△	2					2				藤原仁志
		熱流体システム	☆	2						2			島野健仁郎
	電気電子工学	電気回路及び演習	■	3			4						田中康寛, 三宅弘晃
		電子回路	△	2				2					田中康寛
		計測工学	△	2					2				田中康寛
		電気機器	☆	2						2			土方規実雄
	制御工学	システムダイナミクス及び演習	■	3				4					鈴木勝正, 野中謙一郎
		制御システム設計	△	2					2				野中謙一郎
		制御理論	☆	2						2			関口和真
	ロボット工学	ロボット工学	☆	2						2			金宮好和
		ロボット工学応用		2							2		金宮好和
	宇宙工学	航空宇宙工学概論		2						2			大槻, 小林, 長谷川
		宇宙システム学	☆	2						2			宮坂明宏, 越石英樹
	応用分野科目	知的財産		2									伊藤剣太
		特別講義(1)		2									
特別講義(2)			2										
特別講義(3)			2										
開講目録	Cプログラミング及び演習	■	3			4						野中謙一郎, 関口和真	
	数値シミュレーション	△	2				2					渡邊力夫, 永野秀明	
	ロボット制御プログラミング	△	2					2				野中謙一郎	
実験実習科目	基礎設計製図	○	2	4	(4)							平野重雄, 土方規実雄	
	機械工作実習	○	2	(4)	4							熊谷正芳, 永野秀明	
	創成設計演習	★	2			4						大谷眞一, 宮坂明宏	
	モノづくり実践演習	★	1			2						土方規実雄	
	機械システム基礎実験	○	2			4						渡邊力夫, 佐藤大祐, 他	
	電気基礎実験	○	2				4					三宅弘晃, 佐藤大祐, 他	
	機械システム応用実験	★	2					4				田中康寛, 他	
	機械システム設計演習(1)	○	2					4				郡逸平, 田中康寛	
	機械システム設計演習(2)	○	2						4			金宮好和, 宮坂明宏	
卒業研究 関連科目	事例研究	★	2						4			全教員	
	卒業研究	○	6									全教員	

卒業要件	60単位			
	以下を含むこと			
	○必修科目	33単位	■学科基礎選択必修科目	6単位
	△選択必修科目	14単位	★実験実習選択必修科目	4単位
			☆研究室指定選択必修科目	2単位

履修上の注意事項

各年次における条件等

1. 履修登録単位数の制限

卒業までの各1学期あたりの履修登録可能な単位数は、24単位を上限とする。
ただし、科目によりこの制限に含めない場合があり、また、成績優秀者に対して超過履修が可能になる場合がある。詳細は「履修要綱」の「3. 履修心得ー7. 履修登録単位数の制限」を参照すること。

2. 単位修得状況や成績に関する指導

1年次前期終了時に修得単位が10単位未満*の者に対しては、学修意欲の促進と成績向上を目的として、クラス担任が面談等の個別指導を行う。また、1年次終了時に修得単位が20単位未満*の者に対しては、クラス担任が面談等を行い、勉学意志の確認や進路変更を含めた今後の進め方に関する相談および指導を行う。なお、いずれの場合も途中で休学がある場合はその期間を考慮して対応する。

また、各年次終了時に、GPAが0.6未満の者には、退学勧告を行う。

3. 3年次進級条件

2年次終了時に修得単位が60単位未満*の者は、3年次へ進級できず2年次に留年となる。

4. 卒業研究着手条件

4年次になると各研究室に所属し、「卒業研究（通年6単位）」に着手するが、下記の条件を満たしていなければ着手できず、3年次に留年となる。なお、TAP（東京都市大学オーストラリアプログラム）に参加する学生についても本学科では同じ条件が適用される。

		卒業研究着手条件*		T A P 学生用卒業研究着手条件*	
総単位数		1 0 0 単位（ただし、下記の各要件を含むこと）			
共通分野	合 計	2 0 単位			
	教養科目	1 0 単位			
	外国語科目	8 単位	以下を含むこと ○必修科目 6 単位		
	体育科目	2 単位	○必修科目であること		
専門分野	合 計	7 6 単位			
	工学基礎科目	3 0 単位	以下を含むこと ○必修科目 1 6 単位 △選択必修科目 8 単位		
	専門科目	4 6 単位	以下を含むこと ○必修科目 2 1 単位 △選択必修科目 1 4 単位 ■学科基礎選択必修科目 6 単位 ★実験実習選択必修科目 2 単位		

5. 卒業要件

4年以上在学して、下記の卒業要件を満たした者は卒業となる。

		卒業要件*	
総単位数		124単位（ただし、下記の各要件を含むこと）	
共通分野	合 計	20単位	
	教養科目	10単位	
	外国語科目	8単位	以下を含むこと ○必修科目 6単位 選択科目(英語科目) 2単位
	体育科目	2単位	○必修科目であること
専門分野	合 計	90単位	
	工学基礎科目	30単位	以下を含むこと ○必修科目 22単位 △選択必修科目 8単位
	専門科目	60単位	以下を含むこと ○必修科目 33単位 △選択必修科目 14単位 ■学科基礎選択必修科目 6単位 ★実験実習選択必修科目 4単位 ☆研究室指定選択必修科目 2単位

* 卒業要件非加算の単位数は含まない。

履修上の注意事項

1. 学習・教育目標

本学科では、次代の要請に応じた機械システムの中核を担うことのできる技術者を育成するため、次の学習・教育目標を定め、専門知識と実践的経験を双輪とした教育課程（カリキュラム）を体系的に編成している。学修要覧、教授要目（シラバス）、以下にまとめた履修上の注意事項をよく読み、自身の入学年度の教育課程を十分理解した上で、本学科を卒業するまでの履修計画を立てなさい。

- A. 社会人として必要な教養、語学能力、国際的思考の習得と心身の鍛錬と共に、工学全般に必要な物事の考え方、基礎知識・能力、技術者としての心構えや倫理観を学ぶ。
- B. 工学全般の基礎となる工学基礎科目の学習と共に、機械システム工学を構成する各専門分野の基礎力を習得する。
- C. 各専門分野の基礎的な物理現象や計測・制御技術などを実際に体験し、習得した基礎力を実践力へと高める。
- D. 実際に機械システムを設計し統合する理論を学ぶため、必要となる高度な専門知識を習得する。
- E. 専門分野の理論的な裏付けのある発想に基づいた実践的な問題解決能力を、現実の機械システム全体にまたがる課題を解決する経験を通して身に付ける。
- F. 大学院進学を見据え、幅広い工学的知見と発展的課題を解決する高い実践力を養う。
- G. 実践的な総合学習を通して、技術者の責任や役割を理解し社会を担う気概、自発的な計画性、主体的な行動力、論理的思考による問題解決能力を総合的に習得する。

2. 専門分野の科目

専門分野の科目は、工学基礎科目と専門科目の二つの科目区分に分かれており、二つの科目区分もそれぞれ、数学系・自然科学系・情報系・工学教養系の4種類、学科共通・材料力学・熱流体工学・電気電子工学・制御工学・ロボット工学・宇宙工学・応用分野科目・プログラミング関連科目・実験実習科目・卒業研究関連科目の11種類の科目群から構成されている。

工学基礎科目は、工学全般の基礎となる科目区分であり、学習・教育目標A、Bのための科目が配置されている。専門科目は、機械システム工学を構成する各専門分野の知識や技術を学習する科目区分であり、学習・教育目標のC～Gのための科目が配置されている。この注意事項の後に示されている履修モデルおよび科目系統図を参考にしながら、各自が希望する専門分野に関連する科目を中心に、卒業要件および卒業研究着手条件に定められた単位数以上の必修科目と選択必修科目を履修する必要がある。

必修科目（○）は、すべて必ず修得しなければならない科目であり、選択必修科目（△）は、定められた単位数以上を修得しなければならない科目である。また、機械システム工学科の専門科目選択必修科目には、学科基礎選択必修科目（■）、実験実習選択必修科目（★）、研究室指定選択必修科目（☆）の三つの特別な選択必修科目が配置されており、これらもそれぞれの科目ごとに別途定められた単位数以上を修得しなければならない。

学科基礎選択必修科目（■）は、機械システム工学の根幹や中核となる専門知識の基礎を演習も含めて学習する科目である。実験実習選択必修科目（★）は、低学年では、専門科目の学習で得られる知識を体験に基づいて実際の工学的な技術や技能と確実に結び付けるために、高学年では、機械システム全体にまたがる問題を解決する経験を通して、現実の機械システムの設計や統合のための実践的な能力を養うために配置された実験実習科目の中で、より発展的な内容を含む実験実習科目である。これらは必修科目に準ずる重要な科目であるため、できる限り多く履修することを勧める。特に大学院進学を希望する学生には高い実践力が要求されるため、これらの科目をすべて履修すべきである。

研究室指定選択必修科目（☆）は、学科の各研究室において卒業研究を行うために履修が必要であると定められた科目であり、配属される研究室が指定する科目を履修しなければならない。

3. 科目履修の心構えとクラス担任

“科目履修におけるすべての責任はその学生自身にある。”という心構えを持たなければならない（これは大学生活全般に当てはまることである）。何らかの問題が起こった場合、本学の教職員はできる限りの支援をいとわないが、その支援は学則に定められた範囲に限られる。無責任で不確定な情報に惑わされることなく、学修要覧のルールに従って確実な対応を取ることを忘れずに行動しなさい。科目履修などを含めて学習や大学生活において不安な点や不明な点がある場合には、自身のクラス担任に相談することを勧める。

4. 科目履修の原則と単位修得の年次配分

科目履修の原則は、配当された学年において科目を修得することである。

よって、履修計画は、配当されている必修科目、選択必修科目などの主要な科目をすべて履修することから検討を始める。このため、共通分野の教養科目は1、2年次では半期1科目程度とし、主に3年次に集中的に履修することが望ましい。ただし、この方針はTAP参加学生には当てはまらないため、別途クラス担任と相談しなさい。

また、3年次終了時に卒業研究着手条件を最低限満たしていれば4年次に卒業研究に着手できるが、この考え方は勧められない。4年次には1週間のうち少なくとも4日を卒業研究に当てる必要があり、科目履修が残っている場合は就職活動との両立が困難である。したがって、1～3年次において1学年ごとに40単位を目安に単位を修得し、3年次終了時までには卒業研究以外の卒業要件（単純に単位数で考えた場合は118単位以上）を満たすことを勧める。

さらに、CAP制により履修科目数の上限は原則半期24単位であること、科目の修得には多くの自学自習時間が必要であることも忘れずに、適正な履修科目数を決定しなさい。

このように配当学年の必修科目・選択必修科目を優先しなければならないため、再履修は留年の可能性を高くする。一度履修を決めた科目の単位は、最後まであきらめず1回の履修で取得することに努めなさい。

5. 工学基礎科目・学科共通科目群および各専門分野科目群の必修科目と学科基礎選択必修科目

工学基礎科目は、機械システム工学のみならず工学全般に必要な基礎科目として、1年次より学習するように配当されている。卒業研究着手条件および卒業要件では、工学基礎科目区分において30単位以上を修得していることを求めており、どの科目も高学年次における専門的な学問の学習に必要となるため、これらの大部分の科目について、特に必修科目（○）と選択必修科目（△）については低学年次に習得する。

学科共通科目群の必修科目、各専門分野科目群の必修科目と学科基礎選択必修科目である、機械工作概論、工業力学(1)、工業力学(2)、電気物理及び演習、材料力学(1)、熱力学(1)、流れ学(1)、電子回路及び演習、システムダイナミクス及び演習、Cプログラミング及び演習の11科目は、機械システム工学の基礎を構成する科目であり、各科目群を学ぶ上で深く理解し、身に付けておく必要がある。

これらの科目は系統的な学習ができるよう1年次より配当しているため、順を追って修得することを勧める。

6. 実験実習科目

機械システム工学科では、講義形式で学習する専門科目の理解を一層確かなものとするために、体験学習である多くの実験実習科目を設け、そのすべてを必修科目または実験実習選択必修科目に指定している。

したがって、必修科目（○）である機械システム基礎実験、電気基礎実験、機械システム設計演習(1)、機械システム設計演習(2)の4科目に加えて、実験実習選択必修科目（★）である、創成設計演習、モノづくり実践演習、機械システム応用実験の3科目もできる限り履修することを勧める（実験実習選択必修科目（★）の事例研究については項目8を参照すること）。

理論は実践することによって初めて本物の知識や技術となる。実験実習科目を豊富に取り入れた履修計画を立て、より積極的な態度で実験実習を学習してもらいたい。特に、大学院の学習においては高い実践力が要求されるため、大学院進学希望の学生はすべての実験実習科目を履修すること、少なくとも機械システム応用実験は必ず履修することを基本的な考え方としなさい。

7. 他学科専門科目の履修上の制限

他学科等の科目履修を希望する場合は、まず「履修要綱」の「13. 他学科・他学部・他大学の科目の履修」を参照すること。機械システム工学科では他学科の科目履修を以下の通りに取り扱う。

機械システム工学科では、修得した他学科の科目を専門科目の選択科目として扱う。

しかし、次のいずれかの制限事項に触れる場合は、卒業要件および卒業研究着手条件の単位として加算することを認めない。

- ① 他学科の科目名が、機械システム工学科の科目名と同一名称である場合
ただし、同一名称の科目には次のものを含む。
 - (a) 番号付きの科目で、番号を除いた科目名が同一である。
 - (b) 汎論、概論などの表記が付いた科目で、それらの表記を除いた科目名が同一である。
- ② 同一名称ではない機械工学科の専門科目において、その講義内容が本学科の専門科目の内容と類似する場合
- ③ 教職課程に配当された次の2科目：機械工作実習、金属加工
- ④ 他学科において開講される製図、実験実習、演習に関する科目

8. 研究室配属と研究室指定選択必修科目・卒業研究関連科目（事例研究、卒業研究）

3年次前期終了時点における単位修得状況から、卒業研究着手条件を満たし4年次への進級時が見込まれる学生には、3年次後期開始時に卒業研究を行う研究室への配属が実施される。配属研究室が決定した学生は、3年次後期に担当している卒業研究関連科目群の事例研究（実験実習選択必修科目（★）、2単位）を履修することができる。この時点で研究室未配属の学生は事例研究を履修できない。研究室配属については3年次の適切な時期に掲示などで周知されるが、事例研究は卒業研究への準備教育を含む非常に重要な科目の一つであるため、必ず履修してもらいたい。

研究室に配属された学生は、指導教員の指示に従って研究室指定選択必修科目（☆）を履修する必要がある。未配属の学生もこの科目の履修は可能であるが、卒業研究を実施する研究室が指定する科目を卒業までに修得する必要がある。研究室指定選択必修科目（☆）には、配属研究室において卒業研究に取り組む際に必要不可欠な科目が定められており、卒業要件として1科目2単位の修得が少なくとも必要である。高学年次に配当する科目は、各研究室の専門分野の必要性に応じて選択することが望ましい科目が多いため、指導教員と相談の上で適切に履修することを勧める。

卒業研究は、3年次後期開始時に研究室配属された学生が、その年度末に卒業研究着手条件を満たした場合、4年次に進級しその配属先において履修できる。3年次後期開始時に研究室未配属の学生が、その年度末に卒業研究着手条件を満たした場合は、別途配属研究室を決定し、卒業研究を履修することができる。この決定方法については、年度末に卒業研究着手条件を満たしたことが確認された後、周知される。なお、3年次後期開始時に研究室配属された学生であっても、その年度末に卒業研究着手条件を満たすことができなかった場合は4年次に進級できないため、卒業研究は履修できず、次年度後期開始時に改めて研究室配属を受ける段階からやり直すこととなる。

9. クォーター開講科目について

工学基礎科目、専門科目の大部分は、クォーター開講（前学期・後学期をさらに分割した期間での開講）である。別途配布される授業時間表では、クォーター開講科目は「前期前」「前期後」「後期前」「後期後」の四つの期間に基づき記載され、セメスター開講（前学期・後学期の期間での開講）科目と区別されている。クォーター開講科目は基本的に週2コマの開講となり、授業への出席だけでなく、予習・復習などの自学自習も短期間で集中的に行うことが求められる。また、クォーター開講科目もセメスター開講科目と同様に、系統的な学習ができるように配置されているため、系統に従い、順を追って履修することを勧める。

クォーター開講科目の履修登録の手続きは、前学期・後学期が開始した時期（「前期前」「後期前」の開始時期）を行うため、特に「前期後」「後期後」に配当されている科目については登録漏れのないように十分注意すること。詳細は「履修要綱」の「3. 履修心得－5. 履修登録の流れ」を参照しなさい。

履修モデル

専門領域の科目一覧

区分	科目群	1 年		2 年		3 年		4 年	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
工学基礎科目	数学系	微分積分学(1)	微分積分学(2)	微分方程式論 ※2	関数論			凡例： 必修科目 選択必修科目 ■ 学科基礎選択必修科目 ★ 実験実習選択必修科目 ☆ 研究室指定選択必修科目 選択科目 ※1 履修学年を問わない科目である。 ※2 クォーター開講科目である。 ※3 対開講科目であり、AB クラスの開講時期を示している。CD クラスの開講時期は前後期、逆であることに注意しなさい。 ※4 夏期集中開講科目である。	
		線形代数学(1)	線形代数学(2)	ベクトル解析学 ※2					
				フーリエ解析学 ※2					
				数値統計学					
	自然科学系	物理学(1)・物理学(2) ※2	物理学(3)・物理学(4) ※2	電磁気学基礎 ※2	相対論入門 ※2				
		物理学実験	化学実験 ※2	生物学実験 ※2	地学実験 ※2				
		化学(1) ※2	化学(2) ※2	分子構造論	生命の化学				
				生物学(1) ※2	生物学(2) ※2				
	情報系	情報リテラシー(1) ※2	コンピュータ概論						
		情報リテラシー(2) ※2	プログラミング基礎	数値解析		ソフトウェア工学概論			
	工学教養系	工学リテラシー ※2				技術者倫理 ※2			
		技術日本語表現技法 ※2							
		環境概論	環境と社会						
		科学体験教材開発	科学技術史						
専門科目	学科共通	機械工作概論	機械材料 ※2						
			工業力学(1) ※2			機械要素 ※2			
			工業力学(2) ※2			振動工学 ※2			
			電気物理及び演習 ※2						
	材料力学			材料力学(1) ※2	材料力学(2) ※2	材料力学(3) ※2	★強度解析学 ※2		
	熱流体工学			熱力学(1) ※2	熱力学(2) ※2	熱力学(3) ※2			
				流れ学(1) ※2	流れ学(2) ※2	流れ学(3) ※2			
	電気電子工学			■電気回路及び演習	電子回路	計測工学 ※2	★電気機器 ※2		
	制御工学				■システムダイナミクス及び演習	制御システム設計 ※2	★制御理論 ※2		
	ロボット工学						★ロボット工学 ※2	ロボット工学応用 ※2	
	宇宙工学						★宇宙システム学		
							航空宇宙工学概論		
	応用分野科目	知的財産 ※1	特別講義(1) ※1	特別講義(2) ※1	特別講義(3) ※1				
	プログラミング関連科目			■C プログラミング及び演習	数値シミュレーション ※2	ロボット制御プログラミング ※2			
	実験実習科目			機械システム基礎実験	電気基礎実験	★機械システム応用実験			
		基礎設計製図 ※3	機械工作実習 ※3	★創成設計演習		機械システム設計演習(1)	機械システム設計演習(2)		
	卒業研究関連科目			★モノづくり実験演習 ※4					
単位数	必修科目	20	13	8	2	4	2	0	6
	選択必修科目	0	4	17 (8+9)	15 (12+3)	14 (12+2)	14	0	0
	合計	20	17	25	17	18	16	0	6

※ 上記の学科開講科目と共通分野の教養・体育・外国語科目の中から、半期 24 単位の履修科目単位数の上限を超えないよう配慮しつつ、進級条件、卒業研究着手条件、卒業要件を満たすように、科目を履修しなければならない。

機械システム工学共通

区分	科目群	1 年		2 年		3 年		4 年	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
工学基礎科目	数学系	微分積分学(1)	微分積分学(2)	微分方程式論 ※2				凡例： 必修科目 選択必修科目 ■ 学科基礎選択必修科目 ★ 実験実習選択必修科目 ☆ 研究室指定選択必修科目 選択科目 ※2 クォーター開講科目である。 ※3 対開講科目であり、ABクラスの開講時期を示している。CDクラスの開講時期は前後期、逆であることを注意しなさい。	
		線形代数学(1)	線形代数学(2)	ベクトル解析学 ※2					
				フーリエ解析学 ※2					
				数理統計学					
	自然科学系	物理学(1)・物理学(2) ※2							
		物理学実験							
	情報系	情報リテラシー(1) ※2							
		情報リテラシー(2) ※2	プログラミング基礎						
	工学教養系	工学リテラシー ※2				技術者倫理 ※2			
		技術日本語表現技法 ※2							
専門科目	学科共通	機械工作概論	機械材料 ※2						
			工業力学(1) ※2			機械要素 ※2			
			工業力学(2) ※2			振動工学 ※2			
			電気物理及び演習 ※2						
					機械システム ※2				
	材料力学			材料力学(1) ※2	材料力学(2) ※2				
	熱流体工学			熱力学(1) ※2	熱力学(2) ※2				
				流れ学(1) ※2	流れ学(2) ※2	伝熱工学 ※2			
	電気電子工学			■電気回路及び演習	電子回路	計測工学 ※2			
	制御工学				■システムダイナミックス及び演習	制御システム設計 ※2			
	プログラミング関連科目			■Cプログラミング及び演習	数値シミュレーション ※2	ロボット制御プログラミング ※2			
	実験実習科目			機械システム基礎実験	電気基礎実験				
		基礎設計製図 ※3	機械工作実習 ※3			機械システム設計演習(1)	機械システム設計演習(2)		
	卒業研究関連科目						★事例研究	卒業研究	

※ 上記の科目は、学科開講科目の中で機械システム工学の基盤を構成している科目である。必修科目がほとんどであるが、選択必修科目も多く含まれているため、履修計画を立てる際にはこれらの選択必修科目を中心に履修することが望ましい。

以下には、さまざまな専門分野の技術者として活躍するために、共通な科目に加えて履修することが望ましい専門科目の例をその職種ごとに挙げている。なお、凡例は上記の内容と同様であるため省略してある。

機械設計・構造設計に関わる職種

区分	科目群	1 年		2 年		3 年		4 年	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
専門科目	材料力学					材料力学(3) ※2	★強度解析学 ※2		
	電気電子工学						★電気機器 ※2		
	ロボット工学						★ロボット工学 ※2		
	宇宙工学						★宇宙システム学		
	実験実習科目			★創成設計演習 ★モノづくり実践演習 ※4		★機械システム応用実験			

プラント設計・熱流体機関に関わる職種

区分	科目群	1 年		2 年		3 年		4 年	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
専門科目	材料力学					材料力学(3) ※2			
	熱流体工学					熱力学(3) ※2			
						流れ学(3) ※2			
	宇宙工学						★熱流体システム ※2		
							★宇宙システム学 航空宇宙工学概論		
	実験実習科目			★創成設計演習 ★モノづくり実践演習 ※4		★機械システム応用実験			

計測制御・電気機器に関わる職種

区分	科目群	1 年		2 年		3 年		4 年	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
専門科目	電気電子工学						★電気機器 ※2		
	制御工学						★制御理論 ※2		
	宇宙工学						★宇宙システム学		
	実験実習科目			★創成設計演習 ★モノづくり実践演習 ※4		★機械システム応用実験			

機械制御・システム制御に関わる職種

区分	科目群	1 年		2 年		3 年		4 年	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
専門科目	電気電子工学						★電気機器 ※2		
	制御工学						★制御理論 ※2		
	ロボット工学						★ロボット工学 ※2	ロボット工学応用 ※2	
	宇宙工学						★宇宙システム学		
	実験実習科目			★創成設計演習 ★モノづくり実践演習 ※4		★機械システム応用実験			

履修系統図

